テキスト：背戸山葵
イラスト：藤宮やひろ
誘惑
サキュバス
三姉妹
～甘い罠に堕ちる村～
近未来教養文庫

目次

1. サキュバスの復活 ―― 3
2. 2章チラ見せ ―― 24

第一章　サキュバスの復活

「本当にそれで仲間に入れてくれるの？　マルコ」
リオンは上目遣いで目の前の少年に訊ねた。
「ああ、もちろんさ。なあ、ジェイル、シン？」
リーダー格のエルフの少年マルコは、ふん、と鼻を鳴らし左右のふたりを交互に見た。
「もちろん。ま、都会産のもやしにそんな勇気があるとは思えないけどな」
小馬鹿にしたように肩をすくめ、くせのついた前髪を弄ぶのは、いつも口の悪い金持ちの息子、ヒューマンのジェイルだ。
「だ、だね。女なんかとつるんでる弱虫リオンには無理だよねえ、イヒヒヒ」
長すぎる髪の毛の下からふたりの顔色を伺いながら、ノームのシンは卑屈に笑った。
彼らはルクセン共和国の東部にある、リブリス村の少年たちだ。
対するリオンはリーゼという大きな町出身のヒューマンで、村へは半月ほど前に越してきたばかりだった。
他所者が既存のコミュニティに溶け込みにくいのは大人の世界だけの話ではない。まして、都会から来た新入りが中性的で可愛らしい顔立ちをしており、少年らの憧れる村のお姉さんや女の子たちから好意を向けられているとあった日には。
だがそれでも、リオンは同年代の男の子らのグループに入りたがった。彼としては女の子とのつまらないごっこ遊びよりも、マルコたち悪ガキのするような冒険や大人たちから睨まれる類いの遊びの方がよっぽど魅力的に思えたからである。
「やれるったら……僕だって……」
言いながら、リオンは背後を振り返った。苔生した灰色の岩壁に、暗く巨大な洞穴が口を開けていた。恐れていないことを示そうとしたが、声は震えていた。
お願いだから、としつこく食い下がるリオンにマルコらが示した「仲間に入れてやるための条件」というのは、南の森の洞窟にある、「封印」に触って帰ってこい、というものだった。
封印――百年以上も昔、さる高名な魔術師がこの地方を荒らした三体の魔物を封じ込めたのだと伝えられている。洞窟の入り口には「何人も立ち入ることを禁止する」という意味の古い言葉が刻まれた石碑が突き立てられていた。
近頃ではこの洞窟に入るどころか近づこうとするものは誰もいなかった。それは、半ばは伝説を恐れてのことであり、もう半ばはこの洞窟の辺りに赴くような用向きがないためであった。
「うう……みんなはその封印っていうのがどんなものか知ってるの？」
町から来たリオンは封印や伝説についてまるで知識がなかった。ここには昔の恐ろしい魔物が封印されているのだと、つい先ほど少年らから聞かされただけだ。だからせめて正体を知ることで怖さを和らげようと、そう思って訊ねたのだが――。

「えっ!? どんなものかって、そ、そりゃあ、なあ？ あれだよ」
ジェイルに視線を送るマルコの困ったような表情が質問の答えを物語っていた。
「ああ、あれだよな、マルコ！ だけど、それを教えたらつまんないだろ？ つまりこれは、男の証明ってやつだから――」
「そうそうジェイルの言う通りだよ。わかったらさっさと行ってこい。ああ、ちゃんと行った証拠持って帰れよ」
「証拠って……何を持って帰ればいいんだ？」
可愛いやつらだな。込み上げる笑みを堪えつつリオンはわざと彼らが困る質問をした。
「あ、え、ええと……じ、自分で考えなよそのくらい！ ねえ？」
「ま、そういうこった」
シンの言葉をマルコが請け負った。
「うん。わかったよ」
リオンは暗い内部を覗かせるほら穴へと向き直った。
「三人とも、戻るまで帰ったりしないでね」
ちらっと振り返り、釘をさすように言い残すと、焚火から火をもらって松明を付け、燃え盛る火を頼りに、洞窟の奥へと進んでいった。
リオンの姿が闇に飲み込まれ、足音も聞こえなくなってから――。
「あいつ、あんまりビビッてなかったっぽい？」
焚火に小枝をくべながらジェイルが言った。
「ああ、思ったより根性あるじゃねえか」
不満げなジェイルと比べて、マルコは少し嬉しそうだ。
「大丈夫かなぁ……」
「なんだよシン。リオンのこと心配してんのか？」
「ち、違うよ……ジェイル。ただ、魔物が怒って出てきたらまずいんじゃないかなって」
「はははははっ、何だよお前、じいちゃんたちの話信じてんのかよ」
「あり得ないって、この辺じゃヤバイ魔物だって珍しいだろ」
臆病なシンの言葉に、封印された魔物の伝説など頭から信じていないマルコとジェイルは、声を上げて笑った。

松明を頼りに、荒い岩肌を手で確かめながら洞窟の奥へと進む足取りは、外で待つ悪ガキどもの期待とは裏腹に軽やかだった。暗く狭い穴へと潜る本能的な恐怖はあったものの、三人の怖気づいた態度が、却ってリオンの恐れを和らげてくれたようだった。

度胸試しのようなことを仕掛けて置いて、誰もここに立ち入ったことがないのだ。理不尽な話ではあるが、リオンはこれを自分の勇気を示すまたとないチャンスだと捉えていた。口の達者なジェイルの言葉を借りれば、男の証明である。この通過儀礼（イニシエーション）をクリアすれば、きっと彼らは自分を認めざるを得ない。そうリオンは確信していた。

気がかりがあるとすれば、洞窟の中に試練を果たした証拠となるものがあるかどうかだった。だが、たとえ目ぼしいものがなかったとて、それらしい話の一つでも土産にすれば、確認するまでもなく彼らは納得してくれそうだった。

洞窟の内部は外よりもいくぶんか涼しく、空気は湿り気を帯びていた。特に不快な臭いもない。道なりは上下に、左右にくねりながらだらだらと続いている。奥へ進むにつれて、道の幅は少しずつ広くなってきているらしかった。

しばらくすると、遠くの方におぼろげに明かりが見えてきた。

どこかと通じているのだろうか。足取りは自然と早くなった。

光を目指して進むうちに、やがてリオンは明るく開けた空間に辿りついた。

「うわあ、きれい……」

目の前に広がる予想もしていなかった光景に、リオンは思わず声を上げた。

洞窟の上部にはいくつかの亀裂や開口部があるらしく、そこから差し込む外の灯りが、暗い洞窟内に白い筋となって降り注いでいるのであった。幾筋もの陽脚がゴツゴツした灰色の岩肌や大小の石筍に反射して鮮やかに煌めく様子は、まるで神秘的な啓示の瞬間を描きだした宗教画のように美しかった。リオンはしばし息をするのも忘れて、その天然自然の絶景に見入っていた。

「ん？　なんだ、あれ」

ふらふらと前へ進み出たリオンは、光の最も濃く降り注ぐ中央部へと視線を向けた。

広い空間の中央はパンケーキを重ねたように、三段ほど盛り上がっていて、そののっぺりとした頂上に、鉄製の篝籠（かがりかご）に挟まれた古びた木製の祭壇のようなものが見える。

これが例の「封印」なのだろうか？

リオンは好奇心と恐れを半分ずつ抱きながら、石の段を上り祭壇に近づいた。かなり昔のものらしく、教会を模したと思しき装飾の施された屋根を冠するその祭壇はボロボロで、表面の塗装も剥げ、両開きの扉の右側は取れて地面に転がっている。

「封印ってことは、この中に何かあるのかな……オールト様、ごめんね」

神に謝罪を入れつつ、そんざいな手つきで残っている扉を開く。小さな台座の上にロウソクの溶け残った燭台や内側の黒ずんだ杯が置いてある。

壁面に描かれた万物の父、創命神オールトは塗装も剥げ落ち、ホコリを被って、見るも無残な有様だ。

手入れの全くされていない、簡素な古い祭壇、それ以上のものではなかった。しかし、

「ねえ、誰かそこにいるの？」

「だ、誰!?　え、え？」

突然の声にリオンは飛び上がるほど驚いた。慌てて周囲を確認するが、小さなトカゲが岩の隙間に逃げ込むのがちらりと見えただけ、声の主は見当たらない。

「ああ、怖がらせてごめんね、声からすると……男の子かしら？　ぼうや、逃げないで、お姉さんの話を聞いてくれない？」

声の感じからすると年齢はわからないが、若い女の人だろう。村の年寄りや、同年代の女の子のものとは違って、どことなく色っぽい声――聴いているとドキドキするような声だった。

「ど、どこにいるの？」

「よく、わからないわ。ここは暗くて……でも、ぼうやの正面、すぐ近くよ。お願い、閉じ込められてここから動けないの。助けて……」

どうしよう――リオンは顎に手を当てて考えた。

凄く困っていそうだが、この洞窟に閉じ込められているなんて。心当たりは一つしかなかった。

「いや……その、だけどさ、ここには悪いことをして封印された魔物がいるって……お前がそうなんだろう？」

「誤解よ。あたしは村の人と平和にくらしていたんだけど……悪い魔術師があたしを閉じ込めちゃったの。きっと、その魔術師があたしを悪者にしたのよ！　だからお願い！」

その話が本当か嘘か、判別することはできない。ここは一旦帰ってマルコたちに相談する方がいいかもしれない。そう結論しかけてから、リオンの頭に別のもっとよい考えが浮かんだ。

この封印されている魔物をみんなのところに連れて行けば、これ以上ない勇気の証明になるのではないだろうか？

壺から出てきた恐ろしい悪魔を言葉巧みに手懐けたおとぎ話の盗賊のように、上手く扱えるかもしれない。

「わかった。もし、出てこられても、悪いことはしないって約束出来る？」

「もちろん……その代わり、ぼうやにたっぷりイイコトしてあげるわ♡」

イイコト――女の声色と言葉の響きが妙にいやらしかった。

女の悪魔の中には、人間よりも美しく魅力的なものもいると聞いたことがある。妖しく美しい悪魔にしてもらうイイコトについて思いを巡らせると、リオンは下半身に血液が流れ込むのを感じた。

「いやいや、何考えてんだよ……」

相手は人間じゃないんだ。魔物にそんな気を起こすのは馬鹿げている。リオンはかぶりを振って淫らな想像を頭からはじき出した。

「じゃあ、ちょっと待ってね……」

リオンは祭壇の前に屈み込むと、松明で中を照らした。

声は祭壇の中から聞こえていた。それに、この祭壇の大きさからすると、扉の内側のスペースは狭すぎるのである。

おそらく何か仕掛けがあるに違いない。

調べていると、すぐに見つかった。祭壇内部の台座の下に小さな取っ手が付いており、それを回すとオールトの描かれた奥の壁が少し傾いた。どうやら、舞台装置のように中央の台座が回転する仕組みになっているらしい。

錆の擦れる耳障りな音に顔をしかめながら、リオンは繰り返し取っ手を回した。ギリギリと台座が半回転し、壁画が完全に後ろを向くと同時に、隠されていた裏側が明らかになった。

「なんだこれ……」

出てきたのは大な木製の箱だった。中には沢山の藁の緩衝材に埋まるようにキャベツほどの大きさの球体が三つ入っていた。石かとおもったが、表面に皺のような節が波打っており、植物の種か昆虫の蛹のように見えた。球体の放つ香りなのだろうか、ホコリやカビの匂いに混じって、ほのかにくらっとするような甘い匂いがする。

「なんか、変な匂い……これが、そうなのかな？」

リオンは恐る恐るその玉のひとつに手を伸ばした。中に何かが詰まっているのだろうか、ずっしりと重い。丹念に調べようと裏を向けると、驚くべきものがそこにあった。

「助かったわ、ぼうや♡」

「わっ、口！？」

あろうことか、玉の裏側に直径三インチほどの丸い穴が開いていた。さらに、その穴から瑞々しく肉厚な唇が覗いていた。その唇が、動いて喋りかけてきたのである。ビックリしたリオンは玉を取り落しそうになって、もう一度しっかりと掴みなおした。

「ちょっと、あんまり乱暴に扱わないで。優しく丁寧にしてくれなきゃ」

「ご、ごめんなさい……その、びっくりしちゃって」

リオンは黒ずんだ籌籠に松明を刺すと、玉を両手で持ち、穴を覗いた。そこにあるのはどうみても人間の唇、口元だ。丁度玉の内部に人の頭がすっぽり収まっているような――いや、大きさからすると入る筈はない。中はどうなっているのだろか？

「驚かせちゃったかしら……ごめんなさいね。悪い魔術師に閉じ込められて、こうなってしまったの。長い年月をかけて、どうにかここだけ穴をあけることが出来たんだけど……魔力が足りなくて、出られないの」

注意深く女の言葉を聞いていたが、それが真実であるのか、ただの商人の息子であるリオンにはわからなかった。わかるのは、玉の中に口があり、それが先ほどから自分に

話しかけている女のものだということだけだ。
「そこでお願いなんだけどぉ……」
玉の中の女は猫の子を愛でるような鼻にかかった声で、
「ぼうやのおちんちんをしゃぶらせて♡」
「えっ……!?」
予想だにしていない言葉に、リオンは我と我が耳を疑った。性知識は多少なりともあり、時折自慰行為も行うリオンはその意味を知っていたが、知っているだけになぜそんなことを彼女が持ち掛けてくるのかわからなかったのである。
「あたしたちは男の人の精液を魔力に変えることが出来るの。だから、ぼうやが精液を飲ませてくれたら……あたしはここから出るだけの力を取り戻せる……ね、どうかな？」
「は、話は分かったけど……そんなこと……」
していいのだろうか。見ず知らずの、それも得体のしれない魔物に自分の性器を委ねるなんて。それに、この口の主の言うことが本当であればいいけれど、村には悪い魔物を封印したと伝えられているのだ。よくないことに決まっている。
だが、こんな風に封印されているなら、こいつは何も悪いことが出来ないはずだ。だったら、こいつをマルコたちへの手土産にするのはいい考えかもしれない。
だけど――リオンはあれこれと考えを巡らせながら、改めて穴の中を覗いた。ぷっくりとした形のいい唇は、ずっと封印されていたとは思えないほど艶めいている。口の周りの肌も雪を欺くように白い。封印されているのは凄くエッチで綺麗な魔物なのだろう。そう期待すると、マルコたちにこれを見せに行くのはすごく惜しい気がした。
「大丈夫、とっても気持ちいいから……お姉さん、フェラには自信があるんだから♡穴からおちんちんを突っ込んでくれたら、後はお姉さんが全部してあげる♡　だから、ね♡　おねがい、ぼ・う・や♡」
ふうぅ……と穴の中の口が息を吹きかけてきた。果実を思わせる濃く甘い芳香が理性を蕩かし、淫らな言葉が心を揺さぶる。それは良くないことだとわかっているのに、リオンは快楽への誘惑に抗えなかった。
「わ、わかったよ。ちょ、ちょっとまってね。下、脱ぐから……」
「ふふ、素直でいい子ね♡」
リオンは口が上に向くように玉を箱に戻すと、ベルトに手をかけ、煩わしそうにズボンとパンツを脱いだ。異様なまでの興奮に胸が高鳴っていた。忙しない鼓動に合わせるように、充血してなお皮を被ったままのソレがしゃくるように脈打つ。
「ええと……おちんちん、出したんだけど……ど、どうすればいいの？」
「んふふ、そうねえ……あたしはお口を開けておいてあげる。ぼうやはおちんちんを入れてくれればいいからね……そしたら、ふふ……♡」
じゅるり。下品な舌なめずりの音がリオンの耳にまで届いた。

リオンは鼻息を荒くして玉を手に取った。もうすでに、穴の中の口はあんぐりと開いて、真珠のように白い美しい歯列と唾液で絖光ったピンク色の粘膜を晒していた。まさに肉で出来た洞窟。長い舌が物欲しそうにレロレロと蠢く様子があまりにもエロティックで、リオンは無意識にその動きを目で追っていた。

女の人のお口って、こんなにエッチなんだ――。

「じゃ、じゃあ……入れるからね……」

リオンは上擦った声で言うと、場所を間違えないように気を付けながらゆっくりとペニスに穴を近づけていく。

「ああ、ぼうやのおちんちんの濃い匂いが近づいてくるわぁ……♡」

穴から吐きかけられる息が包皮の上からペニスを刺激する。今のリオンにはそのささやかな刺激さえ心地よかった。こんなことをするのは、本当は良くないとわかっている。けれど、だからこそ、背徳感が性的興奮を増大させているのである。

「ふふ、とってもおいしそう……♡　いただきまぁす♡　んんっ……♡」

「ひあっ、あ、あああぁ……」

穴の口はリオンのペニスが近づくと餌を前にした魚めいた勢いで食いついてきた。

熱く滑った口内粘膜が皮の上からペニスを包み込み、柔らかな唇が竿の根元を優しく締め付けてくる。口の中では唾液に濡れた長い舌が、入り込んできたモノの形を確かめるように絡みつき、じっくりと舐め回してくる。

「んんっ……んっ、レロレロぉ……んじゅううぅ……」

「んあ、あああぁ……お口の中、いい……なか、にゅるにゅってしてるよぉ……」

人生で初めて味わうフェラチオの快感にリオンはうっとりとため息をついていた。まるで、熱く蕩けた肉の中にペニスを突っ込んでいるみたいだった。じわじわと気持ちいい感覚が高まってくる。

「ああぁ……男の子のおちんちん、可愛くて、おいしい……んちゅ、んっ、んっ……」

淫靡な魔物の口は、ペニス全体を甘く吸い上げながら、唇で竿を緩く締め付け扱き抜く。その動きに合わせて包皮が引っ張られ、顔を覗かせた過敏な亀頭部に舌が強く押し当てられるからたまらない。男の性感帯を完全に知り尽くした濃厚なフェラチオに、リオンは夢見心地の表情を浮かべて切なげな声で喘いだ。

「んんっ、こ、これ……じぶんでするより、いいよぉ……あ、あああぁ……」

オナニーと違って、予測のつかないタイミングで快感刺激が訪れて、そのどれもが今までに経験したことのないくらい気持ちいいのである。

傍からは、ただ丸い玉にペニスを挿入しているだけにしか見えない。だが、その中にいるのは、いくら人間そっくりの口を覗かせているとはいえ、得体のしれない魔物なのである。委ねてはいけないモノに男の一番弱い部分を委ねている、そんな背徳的な感覚が快感をさらに色濃くしていた。

「んはぁ……ビクビクふるえへぇ……かわいいわぁ……んちゅううぅ……」

「ひああ……そ、そんなに吸ったららめぇ……」
舌が蠢くたびに、甘く吸い上げられるたびに、唇で扱かれえるたびに、自然と腰が悶え、玉を掴む手に力が籠る。痺れるような射精感が腰全体にじわりと広がっていく。
「んっふぅ……そろそろ、皮をムキムキしてあげようかしらぁ……んぢゅぼ……」
魔物は唇の締め付けを強め、ペニスをより深く咥え込んだ。その動きに合わせて口の中で包皮がぬるりと剥き下ろされる。
「ひあっ!? なに、おちんちん、破れた!?」
引っ付いた皮が剥かれる時の鋭い刺激にリオンは眼を白黒させて驚いた。勃起しても亀頭が隙間から覗くだけの状態が当たり前だった少年にとって、包皮が完全に剥けるなんて考えてもみないことなのである。
「心配しないれぇ……とっても気持ちよくなるからぁ……んちゅるうぅ……」
だが、穴の口はリオンの戸惑いを無視するかのように、容赦なく剥きたてのペニスをしゃぶり抜いてくる。普段包皮に守られているために尖端部はあまりにも過敏で、口内粘膜の爛れるような熱さがよりはっきりと感じられる。皮の上から舐められていた時とはまるで違う、直(じか)に触れる粘膜の喜悦。
「くちゅ、んじゅる……はあぁ……チンカスこんなに溜めちゃってぇ……」
「あ、あつぅ……ひいいぃ……あ、あああぁ……これ、すごいいぃ……」
唾液で滑った舌が溜まった恥垢をこそぎ落としながら、赤く腫れた亀頭粘膜をねっとりと舐め尽くす。裏筋をくすぐり、鈴口にキスをするように舌の先を押し付ける。それらの刺激の一つ一つが、強烈なまでに気持ちいい。熱く滑った口の中で、ペニスが飴玉みたいに溶かされそうだ。
「んああぁ……んっ、いいよぉ……はぁ、はぁ、きもちよすぎるぅ……」
快楽を求める男の本能なのだろうか、少年は荒く息を吐きながら、腰をヘコヘコと前後させ始める。そのぎこちない動きによって粘膜同士がよりいやらしく絡み合いさらなる快感を生み出した。
「じゅるぅ……んちゅ、はあぁ……剥きたておちんちん、おいし……ちゅうぅ……」
穴の口は身勝手に動くペニスに甘い吸引を加え、沁み出す先走りを啜りたてながら、顔を前後させるようにして、竿やカリ首を入念に扱き抜いてくる。ストロークに合わせて口の端から、ぶぼっ、ぶぶぶっ・……と下品な音が漏れ出す。一秒ごとに突き上げるような感覚が濃くハッキリとなってくる。
「あ、ああぁ……こんな、気持ち良すぎて、でちゃうううぅ……」
「んじゅる……いいわぁ、たっぷり出しなさい……んっ、じゅぶ、じゅるるるるぅ……」
魔物は快感に悶えるペニスを舌で弄びながら、トドメとばかりに口を窄めて強く吸い上げてきた。腰の奥で蟠っていた精液が一気に搾り出されていく――。
「あ、あああああぁ……ダメ、でるうぅぅ〜〜〜……」

液体状の快楽が尿道壁を擦り上げながら一気に駆け上り、熱い口内へと撃ち放たれる。爽快な放出感と痺れるような絶頂感にリオンは眼を白黒させた。

「んちゅ、んぢゅうううぅぅ〜〜〜……♡」

玉の中の口は射精中のペニスからさらに精液を引きずり出そうとするかのように、執拗な吸引を繰り返す。男の最も敏感な瞬間への容赦のない刺激。生理的な脈動を無視して、精液が無理やり吸い上げられていく。

「あぁぁ……しゃせーすわれてぇ……ひいいいぃ……」

「まだ、まだよぉ……ぼうやの精液、もっと飲ませてぇ……んぢゅ、んぢゅうぅ……」

イったばかりの亀頭粘膜への刺激は、今まで味わったことのないほどに強烈だった。自分でしていたら絶対に手を止めていただろう。けれど、魔物は何の遠慮もなくペニスをしゃぶり続けてくるからたまったものではない。

「んあああああっ……だ、だめぇ……そんなにしたら、ちんちん、壊れちゃうぅぅ……」

気持ち良すぎて叫び声が勝手に出てしまう。腰が悶え、膝が笑い、立っていられなくなって、リオンはふらふらとよろめいて、しりもちをついてしまった。

「んぢゅぅ……ん、んんっ……はあぁ……んぢゅうぅぅ……♡」

「やめ、やめひぇえ……あ、あひいいぃ……あ、あ、あぁぁ……」

リオンが倒れてもなお、穴の魔物はペニスへの責めを止めない。下品な音を立てて亀頭に吸い付き舐め回し、細い竿をしゃぶりぬく。リオンは眼に涙を浮かべて腰を引き、玉から逃れようとしたが、下腹部から伝わってくる快感のせいで、全然力が入らない。ただただ、容赦のない直後責めに悶絶することしかできなかった。

「ちゅううっ……んっ、ぢゅるるるうぅ、ぶぼっ……」

「あ、あぁぁ……こんなの、きもちよしゅぎてぇ……また、イっひゃあぁ……んんっ♡」

間断ない吸い付きに搾り出されるままに、リオンは続けざまの射精を迎えた。過敏になったペニスの芯を強烈な快感の電流が駆け抜ける。魂が抜けるような絶頂感に、リオンは球体を両手で抱えたまま背筋をのけぞらせ、全身をビクビクと痙攣させながら、魔物の口中に熱い液汁を迸らせた。

「んっふ……はぁ……沢山出せてえらいわね……んれるれる……んはぁ♡」

「ひあ、あ……あぁぁ……」

貪欲な口は放出のご褒美とでもいうように亀頭をレロレロ舐めしゃぶり、先ほどよりも緩やかな吸引を加えた。その甘やかすような優しい刺激に、リオンは恍惚の表情を浮かべ、促されるままに尿道に残った精液をもトロトロと出し尽くしていった。

（なんか……お風呂でおしっこしてるみたい）

尿道に残った精液まで啜り尽くしてから魔物はようやく口を離した。

「んふふふふ……ごちそうさま♡　ぼうやの精液とってもおいしかったわ……♡」

「は……はひ……はっ、はぁ……」

呆けた表情を浮かべつつも、リオンは口が下にならないように気を付けて玉を地面に置くと、尻をついてへたり込んだ。

なんだか、どっと疲れた気がする。だけど、凄く気持ちよかった。

快楽の余韻がまだ身体の芯に残っていて、全身が心地よい脱力感に包まれている。

「ふふふ……魔力が染み渡るこの感じ、久しぶりね……これなら、封印も完全に破ることが出来そうね……」

魔物がそう言うやいなや、玉がブルブルと振動を始めた。出てこようとしているようだ。やがて玉は内圧に耐えきれなくなったように二つに割れた。そこから、血のように赤い煙が大量に溢れ出した。

「あれ……からっぽ？」

だが、それだけだ。他には何も出てこない。二つに割れた玉の中を覗いたが、黒ずんだ内面を晒しているだけだ。

「そっちじゃないわ、ぼうや。上よ上」

頭上からの声に、リオンは天井を仰いだ。先ほど玉から噴き出した煙が渦を巻き、蝟集し、見る間に形を成した。

「わっ……すご……」

煙の中から現われたのは、煙と同じ赤い色のストレートボブの女だった。しかし、その姿形は女神に認められた七種族のヒトのどれでもなかった。背中には禍々しい翼を有し、先端が矢尻のようになった長い尾を生やし、頭には逆巻く角を冠している。

だが、何よりの特徴はその艶めかしい肢体と美貌だった。穴の中に見たのと同様に白い肌にはシミ一つなく、すっきりと通った鼻梁と切れ長の眼が印象的な面長の顔立ちは見惚れるほどに美しい。肉付きは豊かでありながら無駄がなく、ふっくらしたバストからくびれたウェスト、そして張り出したヒップとすらりと長い脚へと続く曲線は芸術的とさえ言えた。身に纏う黒を基調にしたビスチェとショーツ、そして手足を覆うタイトなロンググローブとハイブーツがただでさえ女の性の魅力に溢れる肉体を一層蠱惑的に誇張し、もはやその姿は悩殺的とも言っていいほどにエロティックだ。

女は羽毛のような軽やかさでふわりとリオンの前に降り立った。近くに寄れば尻尾や翼が視界の中心から遠ざかり、人のように見えるはずなのに、内面から溢れ出す妖艶さや色香によって、より人ならざる存在であると認識させられる。

「改めてありがとう、ぼうや♡　あたしはラクス……サキュバスよ」

「サキュバス……淫魔のことか、ほ、ほんとにいたんだ……」

大昔に存在したと言われる、男の精を奪い糧とする、美しい女の姿をした淫らな悪魔だ。リオンは数多くの魔物を記した誇張も多い書物の中にその名を見たことがあったが、実在するとは思ってもいなかった。

「あら、どんないたずらぼうやかと思ったら、結構可愛いじゃない……ここから出してくれたお礼をさせて欲しいのだけれど……♡」

ラクスは舌なめずりをすると、獲物の味を想像するような眼差しをリオンに向けた。
なんかやばい。リオンはよろめきつつ立ち上がり、距離をとった。
「な、何するつもりなんだ？　わ、悪いことはしないって約束しただろ！」
「悪いことじゃないわ、とってもイイコト……お姉さんとしたいでしょう？　ほら、近くにいらっしゃい……噛んだりはしないから……♡」
くすくすと笑い、自らの乳房を揉みしだきながら、ラクスはリオンを追いかけるようにゆっくりと近づいていく。
淫らな誘惑に、リオンの心が揺れ動く。
イイコト。してみたい。
だけど、サキュバス相手にそんなことを許すと、どんなことになるかわからない。
どうにかしないと、という考えが頭の中を巡る。
けれどその考えは焦りを産むばかりで、決して打開策へと繋がらない。
「ぼうやのおちんちんも、お姉さんとシたいって、アピールしてるわよ……おいしそ♡」
「うっ……それは、その……」
サキュバスの視線から隠すようにリオンは両手で股間を覆った。少年の小さな男の器官は、さっき出したばかりだというのに、目の前の妖艶な美女が放つ色香に当てられて、硬く充血してしまっていた。
「はい、つーかまーえた♡」
狼狽の隙を突いて、ラクスは一気に距離を詰め、リオンの背に腕を絡めた。
「ふあ、や、やめて……」
「暴れちゃダメよ……」
慌てて抜け出そうとするリオンをラクスは強く抱きしめた。
身長差があるから、丁度胸のところに顔がむぎゅっと押し当てられる。煽情的な生地から零れそうな豊満な谷間に鼻先が埋もれる。柔らかさと人肌のぬくもりが心地いい。リンゴの果実を思わせる爽やかに甘い匂いが呼吸と共に鼻腔に潜り込んでくる。
「怖がらないで……ぼうやはただ、お姉さんに身を任せていればいいの……」
「んんっ、あぁ……♡　や、やだ……」
これは、なにかよくない。頭ではそう思っても、甘い匂いと柔らかなおっぱいの心地良さに身体から力が抜けていく。両手がだらりと垂れ下がる。抵抗しなきゃいけないはずなのに、腕の中で大人しくなってしまう。
「そう……いい子、いい子……♡　気持ちいい以外、何にも考えなくていいからね……♡」
ラクスはリオンの髪を指で梳くように頭を撫でながら、小さい子を寝かしつけるような調子で囁いた。落ち着いた声が耳の奥に響き、優しい言葉が頭の中に沁み込んでいく。まるで魔法みたいだった。理性がじわじわと蕩かされていく。恐怖も焦りも心地よい感覚の中に溶けだして、何も考えられなくなっていく。

（気持ちいい……お姉さんのおっぱい……）

リオンは自らラクスの背中に腕を回し、豊満な胸に顔をぐりぐりと押し付けた。

と、ラクスの手がリオンの顔を上向かせる。

「ふふふ……もう完全に出来上がっちゃったわね♡」

焦点の合わないリオンの視界に、ラクスの妖艶な美貌が映る。切れ長の涼やかな眼に見つめられているだけで、心が甘く痺れていくようだった。

「ほうら、仕上げをしてあげるわ……チューしましょ♡」

「あ……」

ぽってりと肉厚な赤い唇がゆっくりと迫ってくる。グロスを塗ったようにテカテカと艶めくいやらしい唇。チューという言葉の意味とこれからする行為を理解すると同時に、しっとりと濡れた柔らかさが唇に押し付けられていた。

「あむっ……んっ、ふぅ、んんんつ……あはぁ……♡」

「んんっ……んっ、ふうぅ……んっ、むうぅ、ふうぅ……」

それはリオンにとって初めての口付けだった。

だが、ラクスはそんな初心な少年のことなどまるで気にせずに、弛緩した唇の隙間に舌をねじ込んだ。

唾液で滑った長い舌が舌に絡み付き、口蓋をくすぐり、粘膜をねっとりと舐めしゃぶる。まるで口を口で犯すような、強引で濃厚なディープキス。生まれて初めて味わう口付けの快感にリオンはラクスに抱き付いたまま切なげに肩を震わせる。

「んふぅっ……んっ、ふううぅ〜……はあぁ……」

「んんっ、んっ……」

繋がった口を通じて息が吹き込まれるたびに、濃厚に甘い女の匂いが口いっぱいに広がり鼻腔を犯す。恍惚とした感覚で脳が痺れ、理性がますます蕩けていく。

「れろぉ……んっ、ふふっ……んちゅ、ぢゅううっ……ぼうやの舌おいし……♡」

ラクスは頬を窄め、淫らな音を響かせながら少年の舌を甘く吸い上げる。ピリピリと痺れるような官能が舌先から伝わって、頭の芯を痺れさせる。口内を蹂躙するいやらしい舌使いに、リオンはどんどん無防備になっていった。何もかもが気持ちよくて、気持ちよさで力が抜けて、どうすることも出来ないのである。

「あむっ、ぢゅううぅ……んっ、ふうぅ……ふうぅ……ごちそうさま♡」

たっぷりと少年の口の中や舌を味わいつくし、ラクスはようやく唇を離す。ふたりの唇の間に、どちらのものともわからなくなった唾液が糸を引いて垂れた。

「どうかしら、サキュバスのお姉さんとの、大人のキスの味は……？」

「はあ……はぁ……き、きもち、よかった……」

リオンの顔は快楽に蕩け切っていた。頬を赤くし、潤んだ瞳で、ぽーっとラクスの顔を眺めていた。股間のモノは限界まで怒張し、先端から透明な汁を滲ませるまでになっていた。

大人のキス、というような生易しいものではなかった。サキュバスの口付け、それはまさに男を骨抜きにし、魅了するための悪魔のキスだった。
「それはよかった♡　だったらさ、ぼうや……もっと気持ちいいことしてみたくない？」
言いながらラクスはリオンに地面に横たわるように促した。リオンは抵抗しないということに疑問の余地もないほど素直にそれに従っていた。
「き、気持ちいいことって……ど、どんなこと？」
「ふふふ、それはね……ほら、ここを見て」
仰向けに寝そべった少年の体を跨ぐように膝立ちになると、ラクスは下着をずらし、女の核心をさらけ出した。
秘めやかな肉の結ばれを繊細な長い指で掻き分けて、その奥を見せつけてくる。ピンク色の生々しい粘膜は、すでに男を求めてしとどに濡れそぼっていた。指が出入りするたびに漏れ出る粘液を掻き回すような音は耳が勃起しそうなくらいいやらしい。
「あ、ああ……これ、すごい……エッチだ……」
リオンは丸い目を大きく見開いて下着の隙間から覗く肉の穴を凝視した。
眼が離せない。女の器官を見たのは初めてで、その意味も使い方もわからなかったけれど、凄くいやらしく感じた。
「これがおまんこ♡　女の一番気持ちいいところ……」
「お、おまんこ……」
「ここに、ぼうやのおちんちんを入れて……ズポズポ出し入れするの♡　ぬちゅぬちゅっていやらしい音まき散らしながら、何度も何度も……ね♡」
「あ……う……」
擬音を交えたラクスの挑発的な言葉が興奮と想像を掻き立てる。
口でしゃぶられただけでもあんなに気持ちよかったのに、あそこに突っ込んだらどれだけ気持ちいいんだろう。
想像するだけで身体が熱くなる。
上を向いてそそり立つソレが頷くようにヒクヒクと上下する。感覚はすでに曖昧で、話を聞いているだけで射精しないのが不思議なくらいだった。
「それが、セックスっていう、男と女の一番気持ちいいこと……♡　してみたい？　お姉さんの中に、このガチガチになったおちんちん、挿れてみたいわよね？」
「し、したい……せっくす、したい……！　おちんちん、挿れたい！」
下腹部をじっと見つめたまま、リオンはコクコクと頷いた。
「目の色を変えちゃって……ほんとに可愛いわ、初心な男の子って……♡」
ラクスはペロリと舌なめずりすると、蹲踞の形になって、屹立するその先端に向かって焦らすようにゆっくりと腰を下ろしていく。
くちゅっ……と音が聞こえるくらい生々しい感触と共に、指で拡げられた肉の割れ目に皮に包まれた先端部が浅く潜り込む。

「ああっ、熱い……」
「ぼうやのこれも、すっごく熱いわぁ……」
ラクスは感極まったような媚声を上げ、挑発的に腰を前後にくねらせた。
踊り子の煽情的なダンスを思わせる腰つきと共に、淫らな亀裂の浅い部分に、先っぽが何度も擦り付けられる。
その曖昧な刺激が絶妙にもどかしい。リオンはもっとはっきりした快感が欲しくて腰を突き出すけれど、割れ目の間を滑るばかりで挿入には至らない。
ラクスはそんな少年の必死な姿を愉快そうに見下ろしていた。性欲に突き動かされる未熟な雄が心底可愛らしいのだと、サキュバスらしい痴れた表情が物語っていた。
「あああっ……お、お姉さん……は、早く、早く挿れさせてぇ……」
「んっふふ♡　堪え性のない子ねえ……それじゃあ、ぼうやのことお姉さんが食べてあげるわね……♡」
言いながら、ラクスはゆっくりと腰を落とした。張り詰めた莢が皮を剥かれながら、閉じた肉の奥へ、ぬぷぬぷと引きずり込まれていく。
うねるような肉襞が幾重にも刻まれた絖やかな女肉が竿や亀頭をいやらしく摩擦する。さらに、最奥の壁には細かな粒状の突起が密生していて、それがもっとも敏感な先端部を刺激してくるのだからたまらない。極上の官能。生まれて初めて味わう結合の愉悦にリオンは深いため息を吐いた。
「あ、ああぁ……こ、これ……すごいいぃ……」

「んふふ……ぼうやのおちんちん、お姉さんのおまんこで食べちゃった♡　んふふ、どうかしら？　お姉さんの膣内（ナカ）気持ちいいでしょう？」
「あ、ああぁ……き、きもち、いい……熱くて、し、締め付けられてぇ……」
熱く濡れた襞だらけの粘膜が、全方位からみっちりとペニスを締め付けてくる。まるで、自分の全てを隈なく包み込まれたような心地。ただ挿れただけの状態なのに、気持ちいいという感覚でペニスが蕩けてしまいそうだった。
「締め付けられるのがいいの？　ふふ、こんな感じかしら」
ラクスがそう言うと同時に膣内がうねり始めた。肉壁が雄の全身をいやらしく締め付け、竿、カリ首、亀頭と順繰りに牛の乳搾りめいた圧迫を加えてくる。ペニスの芯にまで響いてくる甘美な刺激にリオンの口から甘い声が溢れ出る。意思とは関係なく腰が悶えてしまう。
「ああぁ……ちょ、これ……中できゅって……あああぁ……」
「凄いでしょ？　あたしはおまんこを自由に動かすことができるの……ふふふ、可愛い顔で悶えちゃって、もっと抱きしめてあげるわね♡」
ラクスはシャツの下に指の長い綺麗な手を潜り込ませて肌をまさぐり、さらに深く腰を密着させ、膣の内部をうねらせていく。
入り組んだ肉襞が性感帯に緩やかに擦れ、ざらついた天井部分が亀頭を押し包む。蜜濡れた粘膜の壁による絶妙な締め付けは、あたかも肉洞の外側から手で握られているみたいであまりにも正確だった。
「ああぁ……ぐにぐに、揉まれて……なにこれ、なにこれぇ……」
「ふふふ、あたしの膣内でぼうやのおちんちん気持ちよさそうに震えちゃって……」
少年の薄い胸板や乳首を指で妖しく愛撫しながら、ラクスはくすくすと微笑する。
「あれだけだしたのに、またイっちゃいそうなのかしら？　んん？」
「う、うん……イっちゃいそう……はああぁ……」
サキュバスの肉壺はまさしく男から精を搾り出すための魔性の器官だった。
まだ挿入しただけで、ほとんど動いていないのに、快楽に特化した内部構造と巧みな収縮によって射精感が込み上げるまでに高められてしまっていた。
「んふふふふ、いいわよ……いくらでも出しなさい♡　ほうら、こんな風に膣内でぎゅ～って……精液搾り上げてあげる♡」
宣告と同時にラクスは膣内の圧力を一気に強めた。根元から先端にかけての搾乳式の圧迫が、甘い痺れをきたしたペニスを一気に追い詰めた。
「んひいいっ……それ、らめ……あ、ああぁ……イっちゃう、イっちゃうぅ～～～♡」
膣内の動きだけで、文字通り精液が搾り出されてしまっていた。雄の本能の動きか、リオンは放出の瞬間、腰を突き上げていた。ペニスの付け根の辺りから込み上げてきた心地よい感覚が、熱い女肉の奥で迸る。

「あっ、あああぁ……なか、まだ、うごいてぇ……し、しぼられりゅぅ……」
膣肉は若い雄からさらに精液を搾取しようと淫らな蠢動を繰り返す。竿全体をぐにぐにと揉み込むその貪欲な収縮運動に、イったばかりのペニスの芯をゾクゾクとした快感が駆け抜け、背筋を這い上り、脳内を恍惚に染め上げる。
「ああっ……んふふ、ぼうやの熱いのがあたしのナカに……ああ、染み渡るわぁ……やっぱり、精液はここでいただくのが一番ね……♡」
生まれて初めて女の胎内に種を吐き出したショックと快楽の余韻に呆けたままの少年を見下ろし、彼の臍の辺りに指を這わせながら、ラクスは感極まったように吐いた。
その表情は息を飲むほど妖艶だ。まさしく男の精を貪り尽くし愉悦に浸る魔性の貌。
ラクスは長い舌で唇を舐め、身体の疼きを慰撫するような忙しない手つきで自らの乳房を揉みしだき、
「ああ、もう我慢できない……本格的に動くわね♡　手加減はしてあげるけど、もっと気持ちよくなるから覚悟してね、ぼうや……♡　んんんっ……」
「ふえ……？　あ、ひあああっ……」
嗜虐の興奮に突き動かされるように腰をグラインドさせ始めた。
魔性の名器がささやかなペニスを隙間なく抱擁したまま、上下に激しく扱き立てる。ストロークのたびに蕩けたように熱く濡れた肉襞が竿やカリ首をにゅるにゅると舐め回し、奥の肉粒が亀頭部や鈴口を悩ましく刺激する。粘液を掻き回すような淫らな音が結合部から溢れ出る。
「ああっ、は、はげしっ……こんなの、しらな、ひいいいいっ……」
内部の収縮だけで果ててしまうほど気持ちよかった雌肉の快楽構造が、少年の初々しい雄肉を容赦なく責め嫐るのである。人が本来味わうべきではない魔性の悦楽。
性に目覚めたばかりの少年は、ペニスから絶えず流れ込んでくる腰砕けの快感に、眼に涙を浮かべて悶え狂った。
「大丈夫、お姉さんが全部してあげるから……ほら、ぼうや……おっぱい♡　好きに揉んでいいからね……」
くすくすと笑い、ラクスは少年の手を自らの胸に導いた。
（おっぱい、やあらかい……おちんちん、気持ちいい……すごい、これ全部気持ちいい）
大人の手のひらにも収まらないほどの、大きくてずっしりと重たいおっぱい。柔らかくて、温かくて、手指を心地よく押し返すほどよい弾力を有していて、いつまでも触っていたくなる。快楽に喘ぎながら、リオンは薄い生地越しに伝わる魅惑の感触に夢中でそのふくよかな乳房を揉みしだく。
「いい子ねえ……んんっ……ああ、たまんない……もっと気持ちよくしてあげる」
ラクスの腰使いがさらに淫らに加速する。下品に両足を広げ、膝のバネを使った騎乗位ピストン。髪の毛を振り乱し、嬌声を上げながら咥え込んだ雄を犯し抜く。その様子はまさに、男を貪る淫らな悪魔、サキュバスそのものだった。

さらにラクスは少年の乳首を弄り始めた。少し硬くなり始めた茱萸のような突起を指先で撫でまわし、爪でひっかくようにカリカリと刺激する。
「さっきから、ココ触ってあげると、気持ちよさそうに反応してるわよね、わかってるんだから……」
「んんっ……あっ、ふううぅ……」
両胸の突端からじんわりと広がる、疼くような甘い快感がペニスから伝わる快感と結びついて増幅されていく。身悶えが止まらない。射精感がぐんぐん高まってくる。
「男の子のくせに乳首が好きなんて、いやらしいわねえ♡　んんっ♡」
「あ、ああっ、あああああぁ……イっちゃ、またイっちゃうよおおぉ……！」
「いいわよ、好きに射精して、お姉さんがぁ、全部受け止めてあげるから♡」
ラクスは激しく艶めかしく腰を振り立て、少年の乳首をキュッとひねり上げた。
「イく、イくうぅ……出ちゃうううぅ……」
その甘い刺激が、リオンを一気に絶頂まで押し上げた。腰がはね上がり、肉穴のより深いところにペニスが潜り込む。極上の快楽を生み出す女肉に四方から締め上げられながら、ドクドクと精液を撃ち放つ。
だが、ラクスはイっている最中でも腰をグラインドさせ続けてきた。下腹部に備わった魔性の雌器は欲望を持った生き物ように少年のモノに吸い付いて、より精液を搾り出そうと収縮を繰り返す。
休む暇もない快楽の連鎖にリオンはあられもない喘ぎを上げて悶え狂った。
「き、きもちいい……あああ、あたま変になる……気が狂っちゃうよぉ……」
「大丈夫よ、狂ったとしても、快楽は感じられるから……思う存分に狂いなさい……」
踊り子のように悩ましく腰をくねらせつつ、ラクスはゆっくりと上体を傾けリオンに顔を近づけた。
「ほうら……キスしましょ、ぼうやの大好きなキス……はあああぁ……」
はいもいいえも聞かないうちに、喰らいつくように少年の薄い唇を奪った。快楽に緩み切った口に熱く長い舌が差し込まれる。
「んんっ、むううううっ……」
唇をしゃぶり、舌を吸い、口内を蹂躙する貪るようなディープキス。絡み合った舌を通じて、リオンの口内に唾液が流れ込んでくる。口の中が快感と甘い匂いで満たされる。
下半身の動きもより情熱的に激しさを増す。ひねるように、掻き混ぜるように、イき痺れた肉棒が蕩けた蜜穴の奥で嫐り抜かれる。男を堕落に導くための淫らな構造が、敏感な部分を的確に、執拗に刺激し続ける。
「んんっ……むうぅ……んはぁ……んむううぅ……」
「はあぁ……おいし……んっ、んんっ……可愛いわ、ぼうや……可愛い……」
上と下から流れ込んでくる粘膜摩擦の快美がリオンの頭の中で色濃く弾け、染み渡る。呼吸もままならない。

気持ちいい。
気持ちいい。
気持ちいい――。
それ以外考えられない。身も心も蕩けるような最高の歓喜が少年を飲み込んでいく。
「んっ、むうっ、んんんっ、むうううぅ――♡」
リオンはラクスにしがみ付きビクビクと体を震わせた。腰をしゃくりあげ、深く結合したまま欲望を熱い粘膜の奥に撃ち放つ。頭が馬鹿になりそうなくらい気持ちいい。恍惚感。陶酔感。幸福感。およそあらゆる快の感覚で満たされる。
射精が終わるまで、ラクスはリオンの口内を犯し続け、その肉壺は若い雄汁を一滴も逃すまいとするかのように淫らな蠕動を続けていた。

「はああぁぁ……おいしかったぁ……」
ラクスはゆっくりと立ち上がると、満足げにお腹をさすった。下着の隙間から濃厚な粘液が垂れ、肉付きのいい太ももを伝っていた。
「ごめんねぼうや……久しぶりの男だから、つい愉しみすぎちゃった♡」
「は……は……あぁ……」
リオンは地面に寝ころんだまま、打ち上げられた魚のように小さく痙攣していた。唾液と涙で汚れた顔を拭う気力もなかった。放心した表情で、薄暗い天井をぼーっと見つめていた。
「これだけ魔力が回復すれば、ふたりの封印も解いてあげられそうね」
ラクスは祭壇の中に手を入れた。両手で掴みだしたそれは、自分が封印されていたものと同様の玉だ。彼女は手のひらに意識を集中し、宙に玉を放り投げた。
玉は宙に浮いたまま小さく震えはじめ、やがて内側からの圧力に耐えかねたように二つに割れた。中から薄緑と桃色の煙が噴き出した。
煙はもやもやと上空を漂い、次第に形を成していった。ラクスと同様の、尻尾や翼を有した美しい女――サキュバスの形を。
「おはよう。姉さんたち」
ラクスはそのふたりのサキュバスに向かってそう呼び掛けた。
「あらあら……」
ピンク色の豊かな髪をなびかせ、レオタードのようなボディラインの浮き出る艶めかしい衣服に身を包んでいるのはペルシス、三姉妹の長女だ。彼女は地面に降り立つと、頬に手を当てて戸惑ったようにラクスを見た。垂れ目で、どこか見る者におっとりとした印象を与えるそんな顔立ちだった。

「ふあ〜あ……おはよラクス」
月のように輝く銀髪を背後で束ね、ローレグのパンツとバストバンドだけを身に着け、褐色の肌とスレンダーなボディラインを惜しげもなく晒すもう一人はシトラス、三姉妹の次女だった。彼女は大あくびをしてからキョロキョロと周囲を見回し、ぼんやりとした眼を擦った。
「ラクス、あなたが私たちの封印を解いてくれたんですね。ふふふ、ありがとう。偉いわねえ、流石は自慢の妹ですわ♡」
「あーしはもうしばらく寝ててもよかったけどねえ……まぁ、とりま、あざお」
地面に倒れる少年とラクスの様子を見て、ふたりはすぐに状況を察したらしく、口々に礼を述べた。
「姉さんたちと違ってあたしは計画的なの。目的のためよ、勘違いしないで」
ラクスは自分と違って封印を破るための努力もしていなかったふたりに対するいら立ちを抑え、地面に倒れたままのリオンを抱き起した。
「だけど、ふたり共ずっと封印されてたから、魔力が失われているでしょ？　ふふ、まずはこの子から精を搾りましょう。ね？　ぼうやも、お姉さんたち三人で可愛がって欲しいわよね♡」
「あ、ああ……ん、うん……」
今の段階でもうリオンはヘトヘトで、これ以上精気を吸われたら、文字通り果ててしまいかねなかった。だが、一度サキュバスがもたらす快楽を知ってしまえば、どんなに精神の強靭な男でも、魔性の快楽への欲望に抗うことは出来なくなる。今の少年もその例にもれず、さらなる愉悦を求めて、淫魔に全てを搾り取られることをさえ、許容してしまっていた。
「けどさー、ラクスその子からまあまあ吸ってっしょ？　今あーしらでガン犯したら、ガチめに死んじゃうくない？」
シトラスがそう言うと、ペルシスが後を引き継いだ。
「そうですよ。小さい男の子を殺すまで吸うなんて、もったいないじゃないじゃありませんか。じっくり楽しまなきゃ……それよりも……」
ペルシスはこの広い空間の入り口の方へ視線をやった。
「そこに、活きのよさそうな子がいるじゃないですか」
「え？」
ラクスは目を丸くして姉と同じように入口を見た。小さな影が別の誰かに引っ張られ岩陰にひっこんだのが、一瞬、目の端に映った。
「あ、気付いてなかった系？　マジ匂ってっから秒でわかっと思うけど」
「そ、そんなわけないじゃない。姉さんたちが気づくかどうか、試したの」
シトラスの言葉にムッとしたように言い返し、ラクスは立ち上がって入口の方へと向き直った。支えを失い、リオンはころんと地面に倒れた。

「覗き見するなんて、いやらしいぼうやたち……隠れてないで出ていらっしゃい。お姉さんたちが可愛がってあげるから」
ペロリと舌なめずりをし、ラクスは反応を待った。逃げられたとしても、捕まえるのは簡単そうだった。
岩の裏には三人の少年が隠れていた。マルコとジェイルとシンだった。
「そこに、生きのよさそうな子がいるじゃない」
そう言って、サキュバスのうち一体がこちらに視線を向けてきた。洞窟の奥で繰り広げられていたエロ過ぎる出来事に、しばし心を奪われていたマルコとジェイルは、慌てて岩の後ろに身を隠した。
「ばか、何ボーッとしてんだよシン！」
だが、シンはぼーっと魔物の方を見つめたまま立ち尽くしていた。マルコは彼の手を無理やり引っ張って、岩陰へ引きずり込んだ。
「マルコ、さっさとズラかろうぜ……このままじゃ、俺らまで捕まっちまう！」
ジェイルが声を潜めて耳打ちした。
「それよりリオンを助けねえと……」
「そ、そうだよ……リ、リオンを助けなきゃ」
一番臆病なシンがマルコの後を請け負った。淫らな光景を目の当たりにして、おさまりの付かなくなった部分を両手で押さえながら。
「いや、俺たちじゃ無理だろ、あんなの。お、お前ら……そんなこと言って、あの女の魔物に……リオンみたいに……」
「ち、ちげーよ！　違うったら」
マルコは怒りを露わに否定した。だが、強い否定は図星の表れである。内心ではリオンを助けようという正義感と同じくらい強く、自分もあの淫魔に犯されてみたいと欲望してしまっていた。
シンは何も答えずにもじもじとうつむいた。
「隠れてないで出てらっしゃい。お姉さんたちが可愛がってあげるから♡」
リオンを犯していたサキュバスが呼びかけてくる。完全にこちらの隠れ場所は見抜かれているらしい。
「じゃあ、オレたちがリオンを助ける。無理でも時間は稼げるだろうから、その間に親父たちに……大人に知らせてきてくれ！」
「チッ、わかったよ！　骨は拾ってやらねえからな！」
だが、ジェイルが洞窟の入口へと駆けだそうとした瞬間、
「お、おねえさん……か、可愛がってぇ……♡」
あろうことか、声に誘われるままに、シンが岩陰から飛び出していた。そのまま、幽鬼のようにふらふらと赤い髪のサキュバス――ラクスの方へと近づいていく。
「馬鹿たれ、なにやってんだよ！」

マルコはシンに駆け寄って、彼を引き留めようとした。しかし、二人の間にピンク色の髪のサキュバス――ペルシスが立ちはだかった。
「邪魔しちゃダメよ、ボク♡」
「くっ……」
抱き付かれそうになったマルコは持ち前の反射神経でそれをかわすと、咄嗟のことに度を失っているジェイルを怒鳴りつけた。
「ぼさっとしてないでさっさと行け！　ここは俺がなんとかするから！」
言いながら、愛用のナイフを抜いてサキュバスと対峙する。
「わ、わかっ――うわあっ！」
マルコの言う通り、入口へ向かって駆けだそうとしたジェイルは、背後からだっこされるみたいに持ち上げられていた。
「ほいほーい、悪ガキひっ捕らえたり～っと」
「くっそ、離せよてめえっ！」
緊張感のない口調で言いながらも、銀髪のサキュバス――シトラスの力は強く、ジェイルがいくらともがいても一向に振りほどくことはできなかった。

第二章　チラ見せ1

ジェイルはシトラスから逃れようと必死になってもがき続けた。だが、淫魔の細い腕のどこにそんな力があるのか、一向に振りほどけない。身じろぎにあわせて繊細そうな銀髪の毛が首筋をくすぐってくるのがこそばゆくてしかたなかった。

「くっそ、なんでこんなやつに……」

「いい加減無駄案件ってわかりなー？　大人しくしないと食べちゃうぞー……あーむっ……」

シトラスは呆れたように言うと、だしぬけに少年の耳を甘噛みした。柔らかな唇で耳のカサを挟み込み、くすぐるように舌を這わせる。

「や、やめろっ！　そんなとこ、ひんっ……」

思ってもみなかった場所への艶めかしい刺激に、ジェイルは身を強張らせた。

しかし、それは不快ではなく快の反応。

甘い怖気が皮膚の下をゾクゾクと這いまわり、鳥肌が立ってしまう。

「あは、ここ弱いんだ。かーいーねえ……あむっ、はむっ……」

シトラスはくすくすと微笑しながら、キスするみたいにカサの部分を啄んでいく。鼻息が耳朶をくすぐり、熱く濡れた舌が形を確かめるようにじっくりと這い回る。

繰り返される刺激の心地良さに、少年の体からだらりと力が抜けていく。逃げ出さなければと理性ではわかっているのに、身体が言うことを聞かない。

強制的にリラックスさせられ、ただされるがままになってしまう。

「お耳おいし……んれろっ……れろれろぉ♡　んんっ♡」

シトラスは興奮したように息を荒げ、長い舌を耳たぶに這わせてきた。そのまま、濡れた舌を耳の穴の中にねじ込んでくる。

奥に入り込もうとするように耳の穴の中で舌がのたうつ。唾液を刷り込むみたいに入念で、脳まで舐め溶かそうとするかのように深い耳愛撫。

「はあぁ……あうううぅ……それ、だめ……やめろぉ……」

「やめな〜い。ちゃけばあーしの耳舐め気持ちいっしょ？　ほら、素直になれたら、もっとレロレロしてあげるよぉ♡」

耳の穴をほじくるみたいに舌が蠢くたびに、ぐちゃぐちゃといやらしい音色が頭の中にまで響いてくる。気持ちいい。ゾクゾクとした悪寒が背筋を這いあがり、肌と言う肌が粟立つ。

「ああぁ……き、気持ちいい……うううぅ、気持ちいいからぁ……」

「いいね。ほら、ご褒美のふぅー……」

細く唇を尖らせて、濡れた耳に息を吹き込んでくる。ゾクゾクとするような甘い刺激にジェイルはシトラスの腕の中で身悶えした。

「はあぁ……うううぅ……」

「んへへぇ……ビクってしちゃって可愛い～♡　れろれろぉ……」
鼻息を荒くしながら、シトラスは再び耳に悪戯を始めた。唇で甘噛みを繰り返し、唾液まみれの熱い舌でカサのくぼみや穴を舐め回す。しつこいくらい入念な愛撫に、少年はどんどん大人しくなっていった。
「キミ、名前は？　あーしはね、シトラス……ちゅっ、んんっ……」
「ふあっ……じぇ、ジェイル……だよ、くああっ……」
気持ちよさのあまり、ジェイルの思考はほとんど蕩けてしまっていて、訊ねられたことを素直に答えてしまう。
「ういういい。じゃあさジェイルっち、リラックスしな。あーしらはぁ……痛いことはしない系だしね」
「じゃ、じゃあ……なにするんだよ……ひぅ……」
「ちょい力分けてもらうだけだよ。代わりにエチエチなことして気持ちくしてあげんの、気持ちいこと、嫌いじゃないっしょ？」
言いながらシトラスはジェイルの下半身に手を伸ばした。
耳舐め愛撫によって高ぶらされた少年のモノには、すでに大量の血液が流れ込みズボンの生地を硬く押し上げていた。
「お耳可愛がってあげたら秒でおちんちん大きくしちゃって♡　これさ、こんままじゃツラみっしょ？」
柔らかな手がズボンの隆起を包み込むように撫で上げ、揉み解すように生地の上からにぎにぎと握ってくる。ペニスの芯まで伝わる心地いい刺激に、ジェイルは腰をくねらせて悶えた。
「あうっ……そ、それ、いい……」
「あーしがコレ気持ちくしてあげる♡　したっけ、あーしも助かるし、ジェイルっちもいい思いできるっしょ？　どーよ？」
耳元に囁きかけられる声はあまりにも甘く、優しかった。
「う、うん……」
ジェイルは彼女の問いかけに、小さく首肯していた。
友達がピンチなのに。自分が大人たちに知らせなきゃいけないのに。それはわかっていたけれど、それ以上に気持ちよくしてもらいたいと体が訴えていた。
それに、このシトラスと名乗ったサキュバスは危険そうには思えなかった。面倒見のいい姉のような雰囲気があって気易かった。
「あは、良い子だね～♡　いっぱい可愛がってあげちゃうぞ～♡」
シトラスは機嫌よく笑いながらジェイルのベルトに手をかけた。魔法みたいな手際の良さで、ズボンはあっという間に脱がされてしまった。すっかり勃起したペニスが跳ねるように飛び出す。
「お、意外とおっきいじゃん……あは、あがってきた♡」

硬く張り詰めた竿にシトラスの指が絡みつき、手のひらが優しく包み込む。
小さな手の柔らかな感触、お互いの熱が交わり合って融けていく感覚にペニスがビクビクと痙攣する。
「はう……ああぁ……それ、いいぃ……」
ジェイルは堪らなくなって、腰を前後に揺すりたてた。竿が緩く摩擦され、カリ首に指が引っかかる。それだけの刺激でもうっとりするほど心地いい。
「もう待ちきれない感じ？　このまま手でしてあげてもいいけど……んー……そーね……尻尾使ったげよっかな♪」
そう言うと同時にシトラスの尻尾がしゅるりと踊った。ジェイルの目前に青紫の尻尾が差し出される。表面は蛇のように艶めいていて、太さは手首ほどもある。先端部は花の蕾のような形状――をしていたのだが、それが、くぱぁ……と割れた。露わになった内壁には複雑なヒダが入り組んでおり、奥の方には大小のイボが見えた。白く濁った粘液が滴る内部の様子は、あたかも内臓を思わせた。
「見てみ。こン中ドロドロのぐちょぐちょで、鬼エロっしょ？」
ジェイルの鼻先にぐっと突き出された尻尾の先っぽから、熱気を孕んだ空気が顔に吐きかけられる。クラクラするような濃厚な匂い。男の性欲を煽り立てる媚薬の芳香だ。より一層ペニスが硬くなってしまう。
「す、すごい……これ、なんか、キモイけど、エッチだよぉ……」
この世のモノとは思えないほどグロテスクなのに、信じられないくらいいやらしい。その中を覗いているだけで淫らな気分が高まってしまう。
「ちょ、キモイっていうなし。これさ、今からキミのおちんちんに被せちゃうんだよ？　わーってんのぉ？」
「あ、あ……」
こんなイボイボで、ヌルヌルの穴にちんちんを突っ込んだら一体どれだけ気持ちいいんだろう――。
シトラスの手の中でペニスがビクビクと痙攣する。
「あっは♡　分かりやすすぎて草。んじゃ、待ちきれないみたいだし、あーしの尻尾で食べちゃうね……」
艶っぽい声で囁きかけながら、シトラスは尻尾をゆっくりとペニスに近づけていく。くぱぁ……と、先端部がさらに大きく裂けた。
熱気がペニスの表面を撫でる。快楽の予感に、屹立がゾクっと震えた。
と、次の瞬間、花弁が閉じ、少年の雄の器官は根元まで尻尾に飲み込まれてしまった。
「あぁぁ……んっ、あ、ひいぃ……こ、これ……」
挿入と同時に直感する。
――これ、ヤバい。

第二章　チラ見せ２１

「ああぁ……ま……だめ、ママ……やわらか……い、いいにおい……くぅ……」
「んふふふ……いい子……従順な子はママ大好きでちゅからね……そうやっていい子にしてるんでちゅよ……それじゃあ、ママの服の中にしまっちゃいまちゅねぇ……♡」
ペルシスはペロリと舌なめずりすると、マルコの身体を優しく抱きしめた。
と、同時に彼女の身にまとう衣服が解けた。
あろうことか、タイトなレオタードやストッキングがもともとの形状を無視して触手のように伸長したのである。
ピンク色の生地がマルコの首や足を絡め取り、引き寄せていく。
あっという間の出来事だった。
少年の小さな体は一瞬のうちに、ペルシスの衣服の内側へと取り込まれてしまった。
ピチピチのレオタードを二人で無理やり着たような状態だ。
両足はストッキングに締め付けられ、両手は臀部のまろやかな膨らみを包み込むような格好だ。ハートに繰り抜かれた胸の所から頭は露出しているが、顔のほとんどの部分はたっぷりと量感のある乳肉に埋もれてしまっている。
「はーい……お洋服赤ちゃんの完成♡　ママと一つになれて、うれちいでちゅね～♡　ぴっちぴちの生地がきゅって締め付けてきて、密着感凄いでちゅねぇ？」
「んむうううぅ……お前は、ママなんかじゃ……ないっ……」
「まだ頑張ろうとしちゃうんだぁ、いじらしいでちゅね♡　だけど、私の服に閉じ込められちゃったらもうおしまい♡　どんな生意気な子でも、ママのことがちゅきでちゅきでたまらない、いい子ちゃんになっちゃうんでちゅから♡」
「だ、だれが……くぅう、動けない……はぁ、はぁ……」
まるで、服と一緒にペルシスに着られているみたいだ。締め付けが強すぎて、逃れるどころか手足の指先を動かすのでやっとの状態だ。勃起したペニスは二人のお腹の間でぎゅっと押し潰されている。
その上――。
「ボクちゃんが吸えるのは私の匂いが染み付いた空気だーけ♡　ほらぁ……服の中でじっとり蒸れたママの濃厚フェロモンでもっとトロトロになりまちょうねー♡」
その香りは吐息の何倍も濃く芳醇だった。
息を少し吸っただけで鼻腔が痺れ、脳が痺れ、心が痺れる。
「すん……この、匂い……ヤバッ……♡　ふうっ、すうぅ、んっ、すうぅ……♡」
嗅いではいけないとわかっているのに、嗅ぎたいという欲望に抗えない。
マルコは自ら顔を胸の谷間に擦り付け、濃密なフェロモンを吸引し続けた。
（これ、ダメ……なのに……好き……ダメなの、とまんないよぉ……）
呼吸のたびに恍惚感が脳内に広がり、理性がどんどん溶けていくのがわかる。

だが、吸い続けてしまう。思いっきり吐いて深く吸い込んで、身体の奥底にまで染み込ませるみたいに。吐き出す空気さえもペルシスの匂いに染まるくらいに何度も何度も。

「うううぅ……ふっ……んんっ……んっ♡」

「あらあら、甘えちゃって可愛い……♡　反抗的だったのが嘘みたい……ふふふ、こういう生意気な子を、従順なボクちゃんにするのってほんとたまりませんわぁ♡」

ペルシスは満足げな笑みを浮かべて薄い生地越しに少年の肌を撫でまわす。

太もも、尻、背中……繊細な指先がさわさわと這いまわるたびに、生地と皮膚の間で生まれた滑らかな摩擦がくすぐったいような、もどかしいような、ゾクゾクとした心地よい感覚となって全身に波及する。淫魔の魅了とフェロモンによって完全に発情させられた少年にとってその刺激はあまりにも快感だった。

「ひあっ……ああっ……なに、これぇ……♡　んんっ、ふっ、ふっ、ふっ……♡」

まるで全身が性感帯になったみたいだった。撫でられた肌が甘くピリピリと痺れ、鳥肌が立つ。窮屈なタイツの内側で、マルコは満足に動くことも出来ずに小刻みに震えることしかできない。

「あらあら……撫でてあげてるだけなのに、こんなにビクビクしちゃって……んふふふ、こうやってレオタード越しにスリスリされるの、気に入っちゃったんでちゅかぁ？　こんなふうにぃ……すーりすーり……さわさわぁ……って♡」

未知の快感に悶える少年の反応を楽しむように、ペルシスは悩ましく身をくねらせながら、生地の上から尻やわき腹をいやらしい手つきで入念に、執拗に撫でまわす。

この性悪なサキュバスは堕ちた獲物を弄ぶのが大好きなのだろう。
あらゆる生物の肉体から性感を引き出す淫魔の巧みな手技に、マルコの口から甘い喘ぎが止まらない。だが、レオタードに閉じ込められたまま身もだえし続けると、汗で濡れた肌と肌が密着した状態でわずかに擦れ合ってしまう。呼吸が荒くなり、意思を蕩かす魔性の香りが否応なく体の中に入ってくる。
逃げ場のない密閉空間の中で快楽がひたすらに高まっていく。不随意の痙攣により、少年の男の部分はペルシスの柔らかなお腹にぐいぐいと押し付けられる。心地よい圧迫感に竿が芯から甘く切なく痺れていく。
もう限界が近いことを察知したペルシスは愉悦に歪んだ唇を舌で湿した。
生意気だった少年が意図もたやすく自分の肉体と魅力に陥落した—そのことに心底満足しているようだった。
「ボクちゃんったら、おちんちんビクビクって震えちゃってまちゅよぉ……くすくす♡ママにだっこされてるだけでもう、気持ちいいお漏らししちゃいそうでちゅね♡」
「なんか……お、おしっこみたいな……きてるぅ……ちんちん、変だよぉ……？！」
エルフのマルコはいつもつるんでいる悪ガキの中では——体格こそ変わらなかったがやや性に関して発育が遅れていた。そのために、今の今まで自慰行為どころか夢精したことがなかったのである。初めて味わう「イきそう」という感覚に狼狽え、自分の身体がおかしくなってしまったのだとさえ思っていた。
「んふふふ……もしかして……お射精したことないんでちゅかぁ……意外でちゅね～……だったら、ママが正しくて気持ちいいお漏らしの仕方、教えてあげまちゅね♡」
そう言って、ペルシスはニィと口角を吊り上げた。支配的な母性を隠そうともしない、邪悪で、淫らで、しかしゾッとするほど美しい笑みだった。
「ね、ボクちゃん。ママの言うことよーく、聞いてくだちゃい……」
「あ……ああぁ……」
ペルシスの声音はまるで頭の中に直接響いているみたいだった。母親のように優しくて、娼婦のように妖しい声。聞いているだけで心地いい。この声の言うことは正しい、なんでもこの声に言う通りにしたい、そんな風に思えてくる。
「今からボクちゃんは、しゃせーっていうとっても気持ちいいお漏らしをしちゃうんでちゅ♡　ママに抱っこされながらぁ……気持ちよくぴゅううぅ……って♡　ママにこれをさせてもらうのが、ボクちゃんにとってこの世で一番幸せなことなんでちゅよ……」
「あっ、あっ……し、あわせ……」
「そう、しあわせ……射精をする時にはね、ママ、ママ～ってママに甘えながらぴゅ～しなきゃいけないの……♡　そうするのが一番気持ち良いい正しい射精のやり方なの、賢いボクちゃんは、わかりまちゅよねぇ……」
「う……んっ……」